

1998.3.1

RIVERSIDE ORCHESTRA FESTIVAL

'98



RIVERSIDE
ORCHESTRA
FESTIVAL
'98

RIVERSIDE
ORCHESTRA

リバーサイド・オーケストラ・フェスティバル'98

1998年3月1日(日) 1:30PM開場 2:00PM開演

かつしかシンフォニーヒルズ・モーツァルトホール

主催/財団法人葛飾区文化振興財団

後援/葛飾区・葛飾区教育委員会・市川市教育委員会・江戸川区教育委員会



本日は、『リバーサイド・オーケストラ・フェスティバル'98』にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。

このリバーサイド・オーケストラ・フェスティバルは、葛飾区を中心とした江戸川沿いの市区でそれぞれ活躍されているアマチュアオーケストラプレイヤーによる交流演奏会として定着してまいりました。葛飾フィルハーモニー管弦楽団、市川交響楽団、江戸川フィルハーモニーオーケストラの3団体が主体となり、プレイヤー同士の交流を図るとともに、地域の皆様に気軽にオーケストラの演奏に触れていただき、クラシック音楽の素晴らしさをご紹介したいということで開催してまいりました。

今回は記念すべき第5回を迎えるにあたり、メンバーを広く募り、まさにフェスティバルとよぶにふさわしいオーケストラが誕生いたしました。

また、指揮/澤和樹、チェロ/向山佳絵子というたいへん豪華な顔ぶれが実現し、この演奏会をいっそう華やかに盛り上げていただきます。

ご来場の皆様には、どうか本日の演奏をお楽しみいただくとともに、今後とも暖かいご声援をお贈りいただきますようお願い申し上げます。

最後に、ご後援いただいた各市区の関係各位、今回企画段階よりご協力くださいました澤和樹先生ほか、事前の準備にご尽力いただいた皆様方に厚く御礼申し上げます。

財団法人葛飾区文化振興財団

皆様、本日はようこそお越しくださいました。江戸川流域を本拠地として活動する3つのアマチュアオーケストラの交流の場として毎年春に行われてきたリバーサイド・オーケストラ・フェスティバル。今回は、5周年ということもあり一気に流域面積(?)を拡げましたところ隅田川、荒川はもちろんのこと多摩川、利根川そしてなんと木曾川(岐阜県)のリバーサイドからもエントリーがあり、音楽を愛し、オーケストラに魅せられた方たちの熱い想いが集まって新年早々から毎週末練習に励んで参りました。リバーサイドにちなんだスメタナの「モルダウ」(いくつかの小さな流れが合流して大河モルダウとなり、流域のさまざまな人々の生活を見守って行くという交響詩)、チェロの若き巨匠、向山佳絵子さんをソリストに迎えてのドヴォルザークのチェロ協奏曲、そしてベートーヴェンの交響曲第7番という充実したプログラムでお届けします。どうか最後までごゆっくりお楽しみ下さい。

澤和樹

P R O G R A M

スメタナ
連作交響詩「わが祖国」より《モルダウ》

B. Smetana : Má vlast' "Vltava"

ドヴォルザーク
チェロ協奏曲 口短調 op.104

A. Dvořák : Violoncellový koncert op.104, B.191

ベートーヴェン
交響曲第7番 イ長調 op.92

L. v. Beethoven : Symphonie Nr.7 op.92

指揮
澤 和樹

Kazuki Sawa



東京芸術大学、同大学院修了。在学中より東京シティフィルのコンサートマスターを務める。安宅賞受賞。ロン・ティボー、ヴェニアフスキなど国際コンクールに数多く入賞。1979~84年ロンドンに留学し、ジョルジュ・パウク、ベラ・カトーナの各氏に師事。84年に帰国後、本格的な演奏活動を開始。89年文部省在外研究員としてロンドンの王立音楽院に派遣される。91年にSAWA QUARTETを結成、国内外で積極的な活動を行う。現在、東京芸術大学助教授、英国王立音楽院名誉会員。また、葛飾フィルハーモニー管弦楽団顧問としても指導にあっている。最近指揮活動にも意欲的で、オーケストラや室内楽での豊富な経験を生かしたオーケストラ・コントロールが注目されている。

チェロ
向山佳絵子

Kaeko Mukoyama



東京芸術大学卒業。9歳よりチェロを始め、松波恵子、故堀江泰氏、レーヌ・フラショー、毛利伯郎の各氏に師事。第54回日本音楽コンクール第1位(1985)、第3回アリオン賞審査員奨励賞(88)、ガスパール・カサド国際チェロコンクール第1位(90)、第2回出光音楽賞(92)など、数多くの入賞・受賞歴を持つ。N響、都響ほか国内主要オーケストラとの共演、ダビッド・ゲリンガス(Vc)、アイザック・スターン(VI)ほか世界の一流演奏家たちとの共演、カザルスホールでのシリーズコンサート出演など、その多彩な演奏活動は常に注目を集め、今後の活動が大いに期待される女流チェリストである。97年11月に、CD「祈り」(ソニークラシカル)を発表。

連作交響詩「わが祖国」より 《モルダウ》 (1874)

B. スメタナ

Má Vlast' "Vltava"
B.Smetana (1824-1884)

本日の演奏会の前半は、ボヘミアの音楽に浸っていただきましょう。ご承知のとおり、ボヘミアは現在のチェコのことですが、長い間オーストリア、ハンガリーに支配されており、スメタナの生きた時代は、まさに独立の気運を生じつつも支配下から逃れられない、という民族的に不安定な状態でありました。そうした政治情勢の中で、スメタナはボヘミア的な音楽語法を追及し続け、チェコを代表する人物として国民に愛され続けてきました。現在でもそれは変わらず、チェコの首都プラハで約1ヶ月に渡って開かれる音楽祭“プラハの春”の初日（彼の命日である5月12日）には、必ずこの“わが祖国”全6曲が演奏されるほどです。その中でも、第2曲“モルダウ”は、親しみやすいメロディとともに、モルダウ川が美しいボヘミアの地を上流から下流へ流れ出る様を華麗に描き出しており、チェコ国民でなくとも感慨深い思いに駆られてしまいます。楽譜にはモルダウ川の様子が次のように書かれています。

「この川は2つの水源から発している（フルート／クラリネット）。流れは岩にあたっては快活な音を立て、陽光を受けては美しく輝き、次第に川幅を増していく。兩岸には狩猟の角笛（ホルン）や農民たちの踊る舞曲がこだまし、夜になると青白い月光に照らされて、水の妖精たちの踊る

のが見える（ファゴット／オーボエ／ヴァイオリン）。やがて流れは聖ヨハネの急流にさしかかり、すさまじい水しぶきをあげる。急流を過ぎると突然視界が開け、流れもゆるやかにプラハに流れ込み、ヴィシェフラトの古城を仰ぎ見ながら、とうとう流れ去っていく…（大意）」

ベートーヴェンと同じく耳の病に冒されていた彼が、全く聴覚を失った時期（1874年）に、このような傑作を書き上げたというのにも、驚くほかありません。

チェロ協奏曲 口短調 op.104, B.191 (1894~95)

A. ドヴォルザーク

Violoncellový koncert op.104, B.191
A.Dvořák (1841-1904)

前出のスメタナを引き継ぐかのように、ボヘミアの作曲家といえ、ドヴォルザークも忘れてはならない存在です。ですが、ある音楽学者が彼を“偉大なる凡人”と称したように、その人柄は典型的なよき夫、よき父であり、芸術家にありがちな奇行や、偏屈な所などはほとんどなかったとされています。しかし彼の“鉄道マニア”ぶりは当時の音楽家の中でも有名だったようで、ドヴォルザークに関する本には、その様子が次のように書かれています。

「こどもの頃は、学校や勉強が終わるとプラハのフランツ・ヨーゼフ駅にかけては、駅員や機関士と話すのが何よりの楽しみであった。そして、発着する機関車の外観からの型式、ダイヤを頭に入れては、そのことを話題にするのに無上の喜びを感じていた。成長し、作曲家としてすっか

PROGRAM NOTES

り有名になってからもそれを延々と続け、自分が多忙になり駅に行けなくなると、弟子たちを代わりに行かせ、時間通りに機関車が発着したかどうか、などと詳しく聞き出しては、ひとり喜んでいたのである…。」

そんな親しみやすかったであろう人柄とは裏腹に、次々と傑作を生み出したドヴォルザーク。このチェロ協奏曲も、技術や内容の豊かさにおいて優れたものであり、かのブラームスをも「こんなチェロ協奏曲が人間の手で書けるということを、私はどうして気がつかなかったのだろう？ もし気がついていたら、とっくに私が書いていたのに！」と悔しがらせているほどです。その傑作は、1894年から約1年かけて、滞在中のアメリカで作曲されました。

第1楽章 アレグロ

冒頭のクラリネットが暗く響くと、次第に他の楽器が加わり、強さと明るさを増していきます。その後の独奏チェロが、朗々とですがなかば即興的に主題を奏でます。全般にわたり、壮大なオーケストラと多彩な独奏チェロとのかけあいで展開していきます。

第2楽章

アダージョ・マ・ノン・トロツポ

遠い母国に寄せた望郷の歌ともいえるべく、ボヘミア的な感傷にあふれ、まさに「歌う楽器；チェロ」の聴き所であり、非常に抒情的な楽章です。

第3楽章

アレグロ・モデラート

この楽章でドヴォルザークは、滞在先のアメリカで耳にした黒人霊歌の

旋律と、ボヘミアの民俗舞曲のリズムを巧みに用いて、作曲者自身の特色を最も色濃く表しています。独奏チェロの技巧的なパッセージも魅力的です。最後はオーケストラ全体で力強く締めくくられます。

交響曲第7番 イ長調 op.92 (1811~12)

L.v.ベートーヴェン

Symphonie Nr.7 op.92
L.v.Beethoven (1770-1827)

ベートーヴェンの交響曲は全部で9つ存在しますが、初期の作品である第1番は別として、偶数番号の交響曲は「田園（第6番）」のように優美で愛らしく、どちらかといえば規模が小さめの作品です。反対に奇数番号の交響曲は「英雄（第3番）」「運命（第5番）」「合唱付（第9番）」といった壮大で華麗な作品というように、性格が分かれています。もちろんこの第7交響曲も、それにもれず華やかな作品であります。この交響曲は、1812年、ベートーヴェンが42歳の時に作曲されました。ご存じのとおり、彼の耳は26歳の頃から徐々に聴覚が衰え、43歳のときには右の耳は完全に聴力を失ったといわれています。絶え間ない不快な耳鳴りに悩まされながら作曲されたというのに、この交響曲はそんな事はみじんも感じさせない、調の中で最も明るいとされているイ長調と、はじけるようなリズムによる動機によって全体が展開されているのには、驚くほかありません。かのロマン・ローランはこの交響曲を次のように表しています。

「この交響曲は、泥酔者の曲であると

いわれている。巨大な哄笑を伴う激情の興奮と、惑乱する諧謔のひらめき、思いもよらぬ恍惚悦楽の態。それは全く酩酊せる人の作品である。力と天才に陶酔する人の作品であった。自ら“自分は美酒を人類のために捧げるバックス(酒神)である。人々に神聖な熱狂を与える者は自分である”と称した人の作品である…。」

第1楽章

ポーコ・ソステヌート・ヴィヴァーチェ

華やかなイ長調の和音が力強く鳴り響いた後、規則正しく上がるイ長調の音階が、曲の幕開けを一層ワクワクさせます。それから突然テンポが速まり、最初にフルートが奏でた主要リズムを展開していきます。

第2楽章

アレグレット

オペラで有名なワーグナーが「舞踏の祭礼」と賛美している楽章ですが、「葬送」という表現が最も多く使われています。ヴィオラから始まる旋律は、物悲しくも美しいので多くの人に愛されています。

第3楽章

プレスト

おどけたような楽章。途中のホルンの旋律が穏やかなドイツの森を思わせます。

第4楽章

アレグロ・コン・プリオ

この楽章の主題となっている旋律は、アイルランドの古い民謡「ノラ・クレイナ」であるといわれています。最後を締めくくるにふさわしい最もリズムカルな楽章です。

(曲目解説：荒川 奈月)

リバーサイド・オーケストラ・フェスティバル

かつしかシンフォニーヒルズオープンに伴い結成された区民オーケストラ『葛飾フィルハーモニー管弦楽団』と、先輩オーケストラとしてすでに地域で活躍されていた『市川交響楽団』『江戸川フィルハーモニーオーケストラ』を迎えて開催した交流演奏会。各団体間の交流およびプレイヤー同士の交流を通じて、葛飾および近隣地域（江戸川リバーサイド）の音楽文化の向上を目的とした。

第1回

1994年3月27日(日)

ワーグナー：楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』前奏曲

指揮/吉川 清 演奏/葛飾フィルハーモニー管弦楽団

チャイコフスキー：幻想序曲『ロメオとジュリエット』

指揮/津田雄二郎 演奏/市川交響楽団

チャイコフスキー：『白鳥の湖』から

指揮/三矢幸子 演奏/江戸川フィルハーモニーオーケストラ

ドヴォルザーク：交響曲第9番 ホ短調『新世界より』

指揮/吉川 清 演奏/3楽団合同オーケストラ

第2回

1995年3月26日(日)

バッハ：『シャコンヌ』（ニールセン編）

マーラー：交響曲第1番 二長調『巨人』

指揮/江原 功 演奏/3楽団合同オーケストラ

第3回

1996年3月24日(日)

チャイコフスキー・プログラム

歌劇『エフゲニ=オネーギン』より“ポロネーズ”

ヴァイオリン協奏曲 二長調（独奏V1：澤 和樹）

交響曲第5番 ホ短調

指揮/江原 功 演奏/3楽団合同オーケストラ

第4回

1997年3月2日(日)

フンパーディンク：歌劇『ヘンゼルとグレーテル』序曲

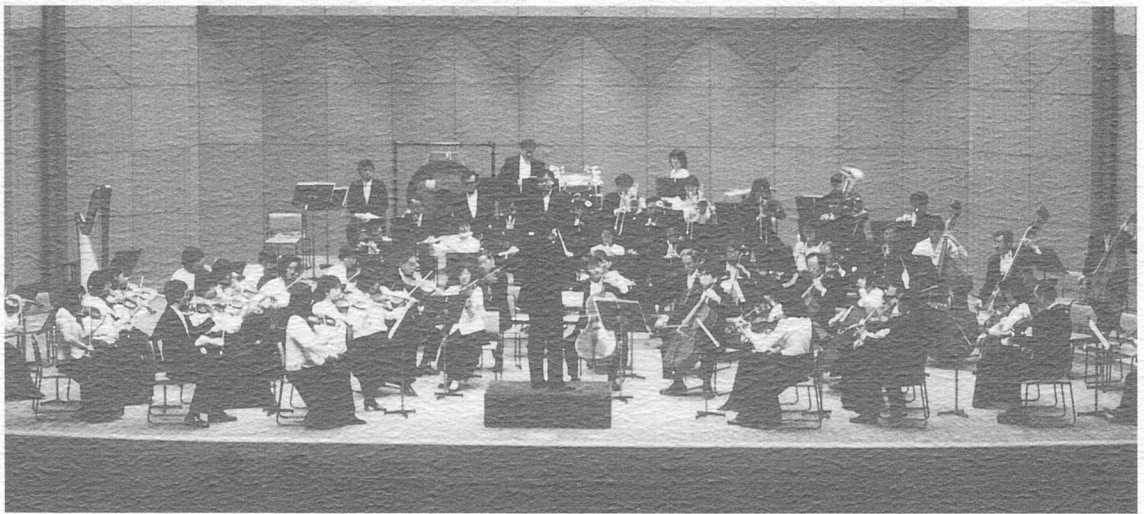
指揮/江原 功 演奏/市川交響楽団

リムスキー=コルサコフ：交響組曲『シェエラザード』（V1：宮川正雪）

指揮/江原 功 演奏/江戸川・葛飾合同オーケストラ

ベートーヴェン：交響曲第5番 ハ短調『運命』

指揮/江原 功 演奏/3楽団合同オーケストラ



リバーサイド・フェスティバル・オーケストラ
RIVERSIDE FESTIVAL ORCHESTRA

葛飾区文化振興財団主催『リバーサイド・オーケストラ・フェスティバル』のために結成。市川交響楽団、江戸川フィルハーモニーオーケストラ・葛飾フィルハーモニー管弦楽団のメンバーを主体に、各アマチュアオーケストラで活躍しているメンバーが集まっている。

出演者

指揮／澤 和樹 チェロ／向山佳絵子 コンサートマスター／野田枝里、大谷幹子

1st Violin	大谷 幹子、大塚由樹子、沖津 史枝、小久保 明、高木 和恵、高田 賀夫、田上 典子、千葉 裕子、富田 直子、野田 枝里、細谷めぐみ、牧 夏子、三澤 要子、村田いずみ、山田 泉
2nd Violin	穂鹿 美幸、荒川 奈月、長田 恵、北島 幸子、小山由美子、高橋あき子、田中 愛子、玉村 栄子、土川智恵子、堀 美佐子、宮下 道代、見山 弘美、見山 雄一、望月 由美、山本みゆき、吉田 真弓
Viola	裏 俊男、可香谷尚三、木村 謙介、久利 敏明、中村 里子、沼田 美恵、松崎 敦子、水野 由里、三宅 俊明、矢代 恭子、幸重 雅也、吉見 誠一
Violoncello	石田 聖子、伊藤久美子、尾崎 裕美、神野 洋平、神原みどり、杉山 憲彦、竹内 貴博、多田弥亜子、林 邦彦、明珍 幸希、宮越 肇
Kontrabass	石橋 俊一、伊藤 智深、片岡 充照、佐藤 晋、中村登紀男、山野辺 健、山本 広和
Flute	今村 賢、沢近 俊輔、三輪 弦子
Oboe	山田 崇裕、山根 克
Clarinet	多田 準也、時田 雄、遣田由美子、吉野 智久
Fagott	海老澤明子、早川 志保
Horn	稲葉 昌司、大高奈穂子、嶋村 恒夫、斎藤小枝子、染谷 規子、穂刈 純一、山内 正晴、山本 恭子
Trumpet	小寺 研太、縄野 光孝、新井本昌宏
Trombone	井上裕美子、大塚 裕、藪崎 裕至
Tuba	谷口 浩
Timpani & Percussion	児玉 和人、阪口 雄二、谷口 仁美、都筑 裕
Harp	小橋かおり
Stage Manager	宮崎 隆男